

Q 44 この間子どもを連れて行った博物館には、いろいろな展示物があることはあるのですが、それを見てそこに書いてある説明を読むだけでは、子どもにとってはおもしろくないようでした。何か子どもが興味を持つような工夫をしている博物館はないのでしょうか？

A 近年、いわゆる「ハンズ・オン」を導入した博物館が増えてきています。

このような博物館では、単に資料や展示物を見るだけでなく、展示物に触ったり、自分で操作して試してみたり、身に付けてみたり、臭いにおを嗅かいだり、味わってみたりと五感を使って、様々な体験活動ができるような工夫を取り入れています。

このような活動を通して、子どもたちの知的好奇心を喚起し、自ら体験的に学ぶことができるような機会を提供していくことが、これからの博物館に求められる大きな役割であると考えています。

博物館が持っている専門的な機能や特性を生かしたいろいろな体験活動を展開している例としては次のようなものがあります。

#### 博物館における体験活動実施例

神奈川県立生命の星・地球博物館では、巨大いんせき隕石、最古の岩石、アンモナイト化石など多くの実物標本に実際に触かって重さや感触を体験できたり、臭いを出す昆虫などの臭いを嗅いで、その臭いを発する理由を考えるなど、単に見るだけでは得られない様々な体験を通して、理解を深めたり、感動することのできる展示を工夫しています。

ベルナール・ビュフェ美術館では、絵画の世界に入り込めるような空間をつくり、そこで、絵画に登場する人物の衣装を身に着け、その絵画の時代背景や雰囲気等を感じることができるなど、絵画に楽しく親しみ、創造する喜びを知る活動を展開しています。

大阪府立近つ飛鳥博物館では、昔の遊び道具を再現し、親子で遊んでみたり、当時の衣装を作成し身に着けてみるなどの活動を実施し、単に身に着けるだけにとどまらず、遊びの意味を考えたり、当時なぜその衣装が必要であったかやその機能的な発達の歴史などについて考えられるような活動を展開しています。

### 【親しむ博物館づくり事業】

このような、博物館活動を支援していくため、文部省では、平成11年度から、青少年が楽しく遊びながら博物館を利用できるようにするための展示の開発や教育普及活動などのアイデアを広く全国から募集して優れた事業を実施する「親しむ博物館づくり事業」を開始しました。

子どもたちが自然科学の原理、技術、歴史伝統文化などを体験を通して学習することができるハンズ・オン手法を取り入れた展示活動や伝統工芸品を作ってみる活動、博物館と学校等が連携した活動を進めるなど、子どもたちに「博物館に行ってみたいな」と思わせるような博物館が少しでも多くなることを目指しています。

「ハンズ・オン」ってなに？

「ハンズ・オン」とは、「実践的に学ぶ」ということで、欧米では日常用語として使用されています。その際、教える側が知識を一方向的に教えるのではなく、学ぶ側が自分のペースで能動的に学習することに重点が置かれます。

博物館活動における「ハンズ・オン」とは、ただ単に展示物や標本資料などを見るだけではなく、五感（触覚、味覚、嗅覚<sup>きゅうかく</sup>、聴覚、視覚）を使って、触ったり、遊んだり、試したり、操作したりすることによって、人々が驚き、楽しみ、なぜそうなるのかを考え、不思議に思う気持ちを持つこと、人の心の動きを誘発するような活動です。

